

第一回 高齢社会検定試験 が実施される

9月14日(土)、『東大がつくった高齢社会の教科書』(ベネッセコーポレーション、3月発刊)をテキストとする第一回「高齢社会検定試験」が、東大駒場キャンパスで実施された。主催は高齢社会検定協会。



500人を超える受験者が、「総合」「個人」「社会」の3コースに分かれて受験。10月はじめには合否が通知され、合格者には「高齢社会エキスパート合格認定証」が授与される。

初めてのことであり、東大が関係していることから、運営事務局は今回の反応・成果をみながら、ていねいに着実に今後の展開をすすめることになる。

東大での「ジェロントロジー」活動の初期の段階から今回の検定までこぎつけた経緯を含めて、東京大学高齢社会総合研究機構(IOG)の客員研究員である前田展弘さんに会場でお会いして、うかがうことができた。

堀内正範 記

参考：「ジェロントロジー」とは

「ジェロントロジー」とは、高齢者や高齢社会の諸問題を解決するために生まれた学際的学問です。医学、看護学、理学、工学、法学、経済学、社会学、心理学、倫理学、教育学などの幅広い領域を包含します。2015年には4人に1人が65歳以上という超高齢社会を迎える日本では、専門分化した学問だけでは対応が難しい複雑な問題が生じてきています。ジェロントロジーを学ぶことは、将来どの専門領域に進む上でも非常に有用です。(東京大学高齢社会総合研究機構 学部横断型教育プログラム【授業概要】「ジェロントロジー」から)

・高齢社会検定協会

一般社団法人高齢社会検定協会は、今回の検定試験の問題作成や管理運営のために東京大学高齢社会総合研究機構が中心になって設立したもので、代表理事は秋山弘子特任教授がつとめている。

・前田展弘氏経歴

ニッセイ基礎研究所生活研究部准主任研究員で、研究・専門分野はジェロントロジー(高齢社会総合研究)、超高齢社会・市場、QOL、ライフデザインなど。2009年から東京大学高齢社会総合研究機構客員研究員。テキストの1～3章、4・5・8章を担当。

・テキスト『東大がつくった 確かな未来視点を持つための 高齢社会の教科書』

東京大学高齢社会総合研究機構・東京大学の各分野の専門研究者を中心にして執筆にあたった。「総論」「個人編」「社会編」の3部構成。2013年3月に今回の検定試験用テキストとしてベネッセコーポレーションから発刊された。

[東大高齢社会の教科書 a](#)

前田展弘さんに会場でうかがう。

・お忙しいところをおそれいます。はじめにいまの前田さんのおしごとは？

「ニッセイ基礎研究所に席を置きながら、東京大学高齢社会総合研究機構の客員研究員としてしごとをしています。2004年に秋山（弘子）先生とごいっしょに、この事業を企画の段階からすすめてきました。」



・「ジェロントロジー」との出会い？ 前田さんがこれが「将来の問題」として見定めたのは？

「いま42歳で19年前になりますが、日本生命で労組本部のしごとを7年間いたしまして、なまなましい事例に接しながら「働くとは」「幸せとは」とかエイジングのことを考えていました。30歳のころですが、友人がアメリカから「ジェロントロジー」を学んで教科書を持って帰ってきて、友人と議論しながらそれを翻訳しました。それがきっかけでしょうね。その後、基礎研究所に移って本格的に関わるようになりました。」

・その後、ご友人は？

「いまは東大で「市民後見」の課題に特化してしごとをしております（宮内康二医学系研究科特任助教）。「ジェロントロジー」を広めることに生涯をかけようと覚悟は決めたものの、ひとつのシンクタンクの方ではどうにももちがあかない。そこで日本でトップの研究者でおられた秋山先生をおたずねいたしました。」

・秋山さんにお会いして、大きな可能性を感じたでしょうね。

「秋山先生との出会いも大きかったです。もうひとつ大きかったのは小宮山（宏）先生との出会いでした。副学長から総長になられるころでした。先生は「知の構造化」をいわれていて、「ジェロントロジー」は総長室直轄のプロジェクトとなり、東大のなかで小宮山先生の面識をえたのが大きかったです。」

・小宮山さんの「高齢社会」に対するお立場は、清家（篤、慶応義塾大学塾長）さんや樋口（恵子、高齢社会をよくする女性の会理事長）さんとは立ち位置が違う。国際的学際的なテクノロジーで「日本型高齢社会」の先端的特徴を活かして、今世紀の科学技術をリードするいろいろなしごとが出てくることに期待されている。

「この日本だからこそ、いま「ジェロントロジー」が必要なのになぜ関心が薄く、だれもやっていないのだろうという思いでしたですね。」

・本来あるべき政治家のしごとの欠落です。ジャーナリストも見える場所にいます。それから学者、前田さんはその中におられる。官僚も経験と資料を持っている優れた人びとですから見えています。そして問題は政治リーダーです。政治家が1999年の「国際高齢者年」の事業のあと、総務庁の優れた官僚を使って将来の「日本高齢社会」のブランドデザインを掲げて活動をスタートさせていたら、日本は「先進的高齢社会」に向かっていただろうと推察されます。残念ながらいまの日本は、国際的に先行はしていませんが先進的とはいえない。

「高齢化の課題先進国であって、それがコンセプトで、そういう認識は持っています。官僚や政治家に対して、東大からもゆるやかなネットワークはできつつあります。学のほうからしっかりした構造にしていく必要があるであろうと思います」

・日本は「高齢化先進国」であり、このままいけばいいと政治リーダーは思い込んでいます。

「統計上の高齢化の率ではそうなっている。」

・しかし日本は「高齢者先進国」であって、「高齢社会先進国」ではありません。この使い分けは重要です。今世紀の小泉首相のとき以来、日本の政治家は「高齢化先進国」だと思っている。高齢者個人にかかわる介護・医療・年金については、熱意を持って善意をもって、ヨーロッパに劣らないよう対応してきました。しかし「高齢社会対策」は手つかずです。「高齢社会対策担当大臣」がいるのに、ご自分が担当大臣であることの認識がない。民主党時代には岡田、枝野、蓮舫さんもそうです。

「近くにブレンが出ればいい。学会との繋がりや弱さが影響しているのかなという感じがします。「日本老年学会」などはむかしから活動しているのですが、学会であって高齢社会に関する知識や課題を政治家に伝えるパイプがこれまでも今でも太くない」

・もう一步ふみこめば、この本でも取り上げているように「人生90年時代」という意識を一般の高齢者が持っていないことに問題がありますね。「人生65年時代ではなく人生90年時代なのですよ」そういう意識で暮らしてくださいと、昨年「高齢社会対策大綱」で要請した。

「最近になってようやく90年人生をいう人は増えてきましたが、それでも少ないですね。」

・一般の高齢者にいまの生き方で十分であるという意識が強い。65歳+余生でいい。余生がいくら長くても、年金と貯蓄で人生いけると思っている。90歳までの25年、計画しなおして主体的に「成熟の人生」を生きないと新しいものにならない。息子や孫の面倒で終わっては新しい高齢社会はつくれません。

「なんでも教育の問題に落としてしまうのはよくないと思いつつも、このテーマは学校教育、社会教育、企業教育といったところで、エイジング教育をどこまでやれるか普及していけるかということ、あともうひとつはエイジング教育のモデルがない。森光子とか有名人の華やかなモデルはありますが、一般の人の人生90年のモデルがない。これから団塊の世代はロールモデルになる。検証できる最初かなと思っています。」

・教育の問題はこの検定試験もふくめて、いま前田さんにとっての課題なのだろうと推察するのですが、高齢社会に関する本が売れないですね。曾野綾子さんが個人の人生として「成熟」(『人間にとって成熟とは何か』幻冬舎新書)を書くと、すぐに35万部。高齢社会についての本はケタ違いに売れません。

「きょうの検定もまだまだだと思っていますけれど、こういうふう積み重ねていくしかない。」



・だいじな事業として見えています。この検定も始まったばかりなのに受験生がよく来てくれている。さすが東大と評価しています。テキストも総論・個人編・社会編と3部に分けて、それぞれの課題を的確にまとめていますし、安くつくるなど見えないところでご苦労もしているでしょうし、しかも「東大がつくった」のタイトルはよくぞ付けた。



「ベネッセ、民間の力です。」

・この課題も本来からいえば、始めから東大が出るようでは、いかに民間の対応が遅れているかの証拠です。民間の前例がさまざまあって、真打登場で東大が出てくる。教育のことでいえば、60歳以上の住民を対象にして自治体あるいは官民協働で経営する「地域高齢者（生涯）大学校」。地場産業、コミュニティづくりなど地域のカリキュラム、高齢期に必要なとする知識を教えるとともに、生涯にわたる仲間づくりを行なう。

「高齢者大学校での生涯学習。この指とまれではなくて、集まってから協働してつくっていくというアプローチのほうがいいかなと。」

・それは世田谷区に近いですね。集まることで問題が見えてきて社会参加していく方式。全国でだいぶ増えましたが、専門科目はそれぞれまったく違う。世田谷区、江戸川区、成田市、いなみ野学園方式などさまざま。成功しているのは芸術技能系の科目。自分で楽しむ、仲間での楽しむ、そして市民と楽しむ。たとえば園芸。じぶんの庭から、となり近所や公園、里山管理まで関心が広がって、「緑のまちづくり」まで繋がる。始めから福祉ボランティア科ではきびしい。きょうは検定のことからはじめるつもりが雑然とした話になって失礼しました。

「あとは「別の機会」にお話しすることに。」

・うかがったところでは樋口さんごいっしょの機会があるそうですが。

「委員会でお会いすることがあります。」

・ではこの講演（高齢社会フォーラム「基調講演」）をぜひお読みください。この国の「高齢社会」形成の途上での歴史的文献のひとつとして知ってほしいと思います。

「読んでおきます。」

検定試験運営事務局の平江良成さん（IOG特任研究員）に聞く

まずどんなメディアが取材にきたかを聞いた。

新聞は『毎日新聞』だけ。きょうのためのニュースリリースは特別に出さなかったという。3月のテキスト発売のときに9月に検定試験をおこなうという情報をえて、ここまで関心を持ちつづけた毎日新聞の記者の「時代を先読みする」感性を評価するが、これだけの質の新事業なのに知らせないのは惜しい。

「正直なところ労力がないのです。わたしと前田のふたりが担当で、それぞれ本業をもつての上のしごとですから。」

そこまで聞いてしまうといいづらいが、1週間ほど前に何か資料を流してほしかった

ところ。受験者が少ないとか不都合があればともかく、見ての実感として検定は大成功であるし、テキストの方も評判がいい。総合・個人・社会の3部門それぞれに受験者はいくつもの教室を埋めている。受験者数を聞いた。

「申し込みが560ですから500人余は受けていますから大成功です。」

そう思う。きょう受けた人の合否は10月前半には個人的に知らされて、「高齢社会エキスパート」の称号が授与される。ちょっと良過ぎではというほどの称号だが、個人的に称号はどう使うことになるのだろう。

「東大が関わっているとはいえ民間資格でしかないので、持ったからといって何ができるというわけではなく、ご自由ということ。テキストからも検定試験の内容からも、一般の人より深い高齢社会の知識を持っている人なんだという評価は十分に得られると思います。」

そこは運営者も受験者も、ともに意図し期待しているところ。他に類例がないだけに、知識も称号もしっかりと活動に活かしてほしいところである。もうひとつ、今後、合格した人たちのグルーピングをつづけるのかどうかを聞いた。

「つづけます。すでに企画はあるのですが、計画というか実施にはいたっていない。どういうふうにするかは検討中です。」

という。すると受験段階では合格後のことは分かっていない。

「ひとつだけお伝えしているのは、合格者を集めたセミナーはやる。将来は教科書の内容が変わってくるし、この検定の更新は考えていないので、新しい内容を伝えていかなければならない。」

それは双方にとって必要だろう。合格した側からいえば、同じ時期に合格した仲間とコミュニティとまではいわないまでも、グループとして活動情報のやりとりの場は期待しているだろう。1回生、2回生・・・運営側は事業の拡大と定着につながる。

「具体的に何をするかは反応をみながらなるべく早いうちに決めます。毎月1回、運営委員会はやっていて、そこでいまの話は最重要課題としていますから。」

検定協会の代表理事は秋山特任教授がつとめる。多彩なテキストの執筆者のなかで、むずかしいまとめ役をこなしている方がどなたかを聞いた。

「鎌田さん、辻さん、大方さんあたりがメインでしょうか。」

事務局は平江さんと前田さんのおふたりで切り盛りしているという。

初期の模索段階での見定め得ない形と質を着実につくっていくには、並み大抵でない苦労がある。ご奮闘とご成功を祈りたい。

最後に受験風景の写真を残したいので、会場のうしろから教官のほうにむかって撮っていいかをお願いした。

「最後の「社会編」の説明時間が10分ありますので、その間なら問題ないと思います。他の方にもそういうことで。」

終始、パソコンの画面をにらみながらの応対であった。

写真説明： ・東大駒場キャンパス会場案内 ・ツクツクボウシの鳴く木蔭で準備する受験生 ・「社会編」検定試験会場で ・キャンパス内風景